

優秀賞

玉結びの記憶

岩手県一関市立磐井中学校

1年 熊谷 琉河

1年後の自分へ。そして、5年後、10年後、20年後、とにかく未来と名の付く全ての世界で生きている自分に対して「絶対に忘れないでほしい」と伝えたいことがある。特に、苦しいことがあった時には絶対に思い出してほしいことがある。「玉結びの記憶」だ。

小学5年生の時、家庭科の時間に裁縫の玉止めと玉結びを習った。けれども、僕はいつまでもうまくできなかった。その時に、手伝ってくれた友達・Aさんがいた。Aさんは、なかなかうまくできない僕に、とてもいねいに、優しく教えてくれた。そのおかげで、ようやく玉結びができた時、「できた!」「良かったね!」と二人で声を上げて喜んだ。

その時の玉結びの記憶を、僕は今でもくっきりと思い出することができる。そして、頭の中の玉結びの画像が切り替わると同時に、机の上の花束の画像がよみがえる。Aさんの机に置かれた花束だ。

Aさんが亡くなった日、僕も学校を休んでいたんで、クラスのみんなよりも1日後に知ることになった。教えてもらったことによると、前日に体調を崩して早退し、その翌日に帰らぬ人になったということだった。Aさんが早退したことは覚えているけれど、まさかその時がAさんを見る最後になるなんて、思ってもみないことだった。

その日以来、毎日のように、Aさんのことを思い出すといえば、やっぱり嘘になる。毎日楽しいこともあったりすれば、そのことに夢中になったりもする。たまに仲間同士でいろいろな話をしている時に、Aさんのことが話題に出てきて思い出す。それぐらいのことになっていた。その時に最初に頭に映し出されるのが「玉結び」だった。

その玉結びが、中学生になってから、小学生の時よりも思い出すことが多くなっていると感じている。中学生生活は楽しいけれど、やっぱり大変なことも多い。やることが多いし、勉強も難しい。中学生になってからテニス部に入り、楽しいけれども、すぐにうまくなるかといえば、そんなことはない。同級生の中には小学校からテニスを始めていて圧倒的に上手な人もいて、その差は埋められそうな気がしない。自分の力に限界を感じ、あきらめそうになった時に、玉結びのことを思い出すことが多くなった。「大丈夫だよ。」「絶対できるよ。」という声も一緒になって聞こえてくる。

あの時の勇気の言葉は、今でも僕のことを助けてくれる。だから、もしもAさんが苦しんでいたり、うまくいかないことがあったら自分が同じように励ましてあげたい。恩返しをしたい。だけどAさんはもういない。こんな悲しい思いをすると分かっていたなら、Aさんが生きているうちに、もっと本気で恩返しのことを考えれば良かったのに。

そんな僕にできることは何か。それは、一日一日を後悔しないように生きることだと思う。後悔しないように、1分1秒も無駄にしないことだと思う。

例えば、テニスの上手な同級生は、全国大会での優勝を本気で目指していて、部活動だけでなく、多くの時間をテニスにかけて頑張っている。本当にすごいと感心してしまう。正直、「それに比べて自分は……。」と思うこともある。けれども、その時に頭の中に思い出される「玉結び」は、「この世に生まれてきた。それだけで素晴らしいことなんだ。」と語りかけてくれる。自分にできることは、目の前のことに全力で取り組むことだと教えてくれる。

Aさんが亡くなってから、テレビのニュースなどで「自殺」のことを意識するようになった。Aさんのように生きたくても生きられなかった人もいる。それなのにどうして生きられる命を大切にしない人がいるのか。ニュースを見るたびに怒りと悲しみが混じった気持ちになった。けれども、中学生になって、大変なことが多くなって分かってきたこともある。僕自身は自殺したいと思ったことは一度もない。しかし、そういう気持ちになってしまう人もどうしてもいるのだろう。もしかしたら、僕の周りにもそんな気持ちの人がいるのかもしれない。そのことに気づき、寄り添ってあげて、「生きているだけですごいことなんだ。」と言ってあげられる人になりたいと思う。

今は毎日が楽しくて、大変なことが多くても充実した毎日を送っている。けれども、これからの人生のどこかで「命の大切さ」を忘れるくらい苦しい思いをするかもしれない。そんな未来の自分に対して、何度でも「玉結び」を思い出してほしいと伝えたい。そのことを思い出せる限り、僕の中でAさんは生きている。そう信じている。